



Dying Fire Consortium

ダイイング・ファイア・コンソーシアム

朽techS 2016

Mature Content



夜の喪服をグロットの深紅の最期が引き裂いた。

——ステファン・グラビンスキ『機関士グロット』

- I. フォマルハウトの盾持ち
- II. 血まみれ人鳥VIII
- III. 執行の吸智鬼
- IV. 緋き春の先触れ
- V. 真円の女王蜂
- VI. デラモルテの饗応者
- VII. 青調の巡視官
- VIII. 聖歌獣
- IX. ソーサレス・エンジン四式

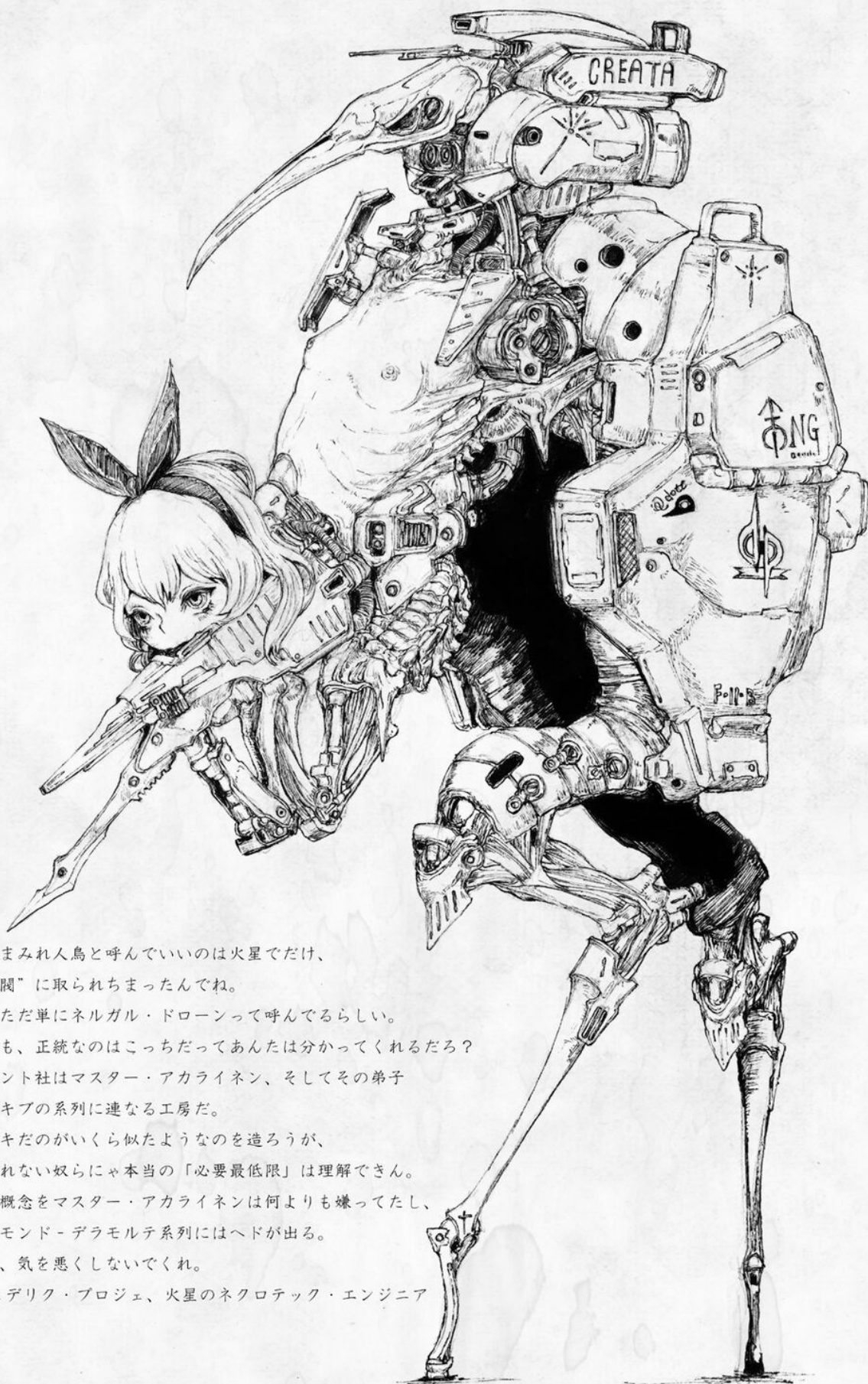


昼がふたりを分かちまで。
夜がふたりを分かちまで。
黄昏のメランジェに暮らし、
彼女と過ごした日々には
分かりようのないことだった。

馴染みの黒い塔を見上げながら、
私はまた分割された時間を
生きていかねばならぬことを知り、
“昨日”でさえない日々を想った。

——貪食者オルドー

『回顧録〜カジェラ篇』



こいつを血まみれ人鳥と呼んでいいのは火星でだけ、
権利は“骸閥”に取られちゃったんでね。
向こうじゃただ単にネルガル・ドローンって呼んでるらしい。
ま、それでも、正統なのはこっちだってあんたは分かってくれるだろ？
ダスクポイント社はマスター・アカライネン、そしてその弟子
マスター・キブの系列に連なる工房だ。
バツだのオキだのがいくら似たようなのを造ろうが、
地球から離れない奴らにゃ本当の「必要最低限」は理解でせん。
高級機って概念をマスター・アカライネンは何よりも嫌ってたし、
俺もクラリモンドーデラモルテ系列にはヘドが出る。
ああスマン、気を悪くしないでくれ。

——フェデリク・プロジェ、火星のネクロテック・エンジニア

∴ 執行の吸智鬼 / Wisdomsucker Carnifex ∴

残っているなら何であれ利用するという精神、これだけは我々と駆体ライブラリー派、
いや屍者に関わる者すべての共通項と言ってもいいだろう。

——ユージーン・グラム、“骸閥”のフィクサー



∴ 緋き春の先触れ / Harbinger of Scarlet Spring ∴

大地に拒絶された屍者達が空を舞う、かつてそれはクヴェレを襲った悪夢だったわ。
今となっては飛ぶネクロテックはそう珍しくないし、宇宙の真空中で活動するやつもいる。
それでもね、火星で見た”浮遊型”は懐かしくて新しかったのよ、
まるで地球の幽鬼のような動きでね、まだまだ色々出てくるんでしょうね。
砂時計戦争から80年経った今、屍者に遭遇しない仕事はほぼないわ。
結局、漿の連中が封殺できた技術なんていくらないでしょ。

——”百足の”ノルガ、歴戦の羅刹鬼





豊の塔がネクロテック規制に動いていた午前、軌道居民たちの昇着配備はどうして遅れることになった訳です。そのせいでネルガル協定との宇宙戦では大きな出血を強いられることになりました。特に、最初期に配備していた機動兵器がカワセミにまるで対抗できなかったために、多くの艦艇が星海の底層になりました。あれらの残骸回収で生計を立てている人々がいまだに冬さないぐらいですね。あの時点では真門には本意の意味でのネクロテック・エンジニアがいませんでしたから、ようやく配備が始まったものも既存の機動兵器に加工だけは上質な昇着を継ぎ接ぎしただけのものが多かったのです。スズメバチの登場でようやくもともに戦えるようになりましたが、その頃にはもう火星圏の自治は——内輪様めは絶えないとはいえ——軌道居民の平沙に容易に屈しない程度には確立されていました。そのころになってようやく塔は、ミカア教授やベリシャ教授をはじめとした歴史学者をダラールの研究機関に集め始めました。私が今ここで講義を行っているのも、そういう訳です。軌道の向こうではここでは言えないようなことも沢山してきましたが、それはまた別の機会にでも……さて、では次は、トネリコ戦争開戦の詳しい経緯ですね。

——ダラール大学歴史学助教授、アイケイシャ・シュライエル

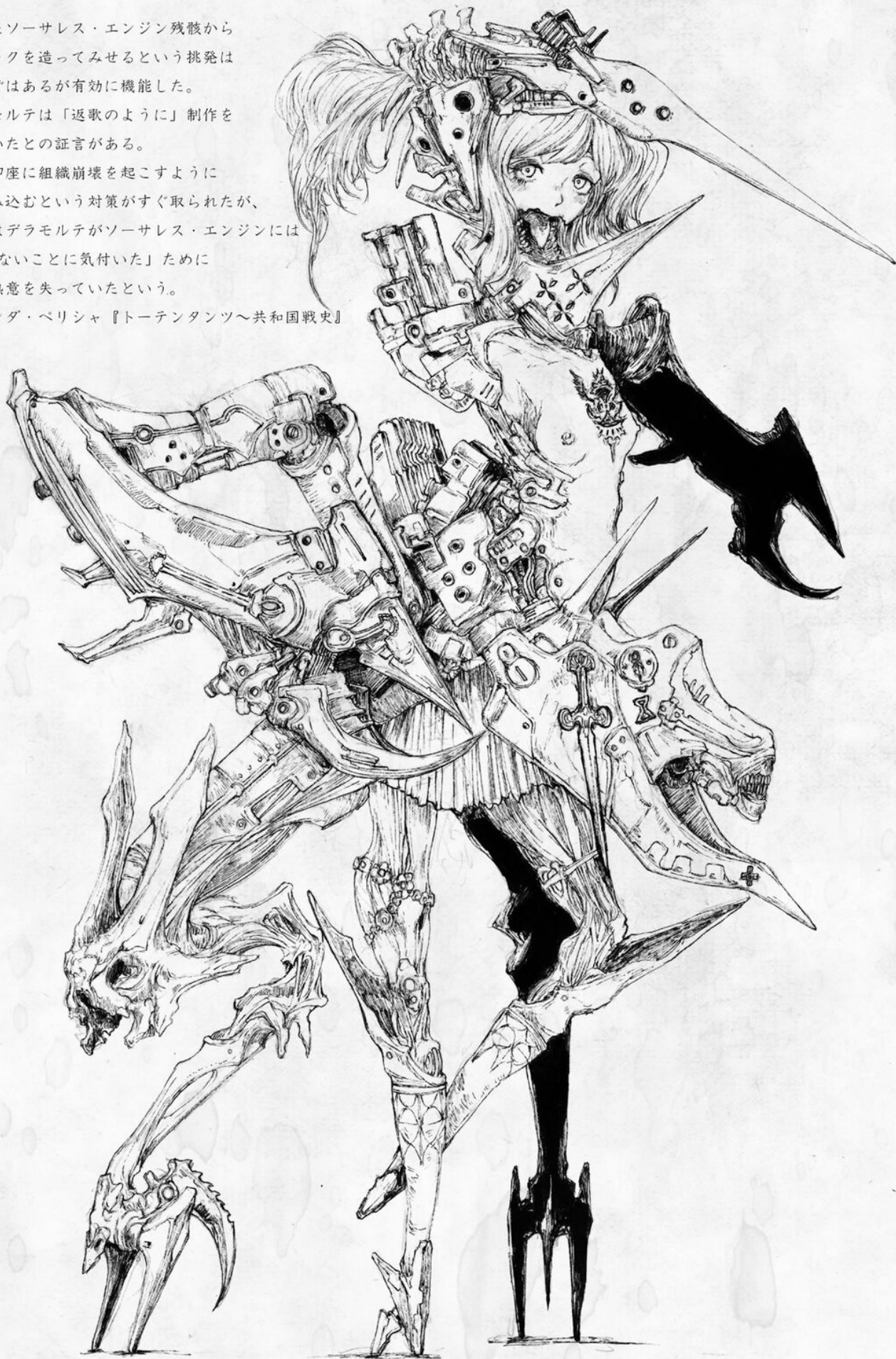


撃破されたソーサレス・エンジン残骸から
ネクロテックを造ってみせるという挑発は
短い期間ではあるが有効に機能した。

特にデラモルテは「返歌のように」制作を
楽しんでたとの証言がある。

死んだ後即座に組織崩壊を起こすように
呪式を組み込むという対策がすぐ取られたが、
その頃にはデラモルテがソーサレス・エンジンには
「作家性がないことに気付いた」ために
とっくに熱意を失っていたという。

——ミランダ・ペリシャ『トーテンタンツ〜共和国戦史』



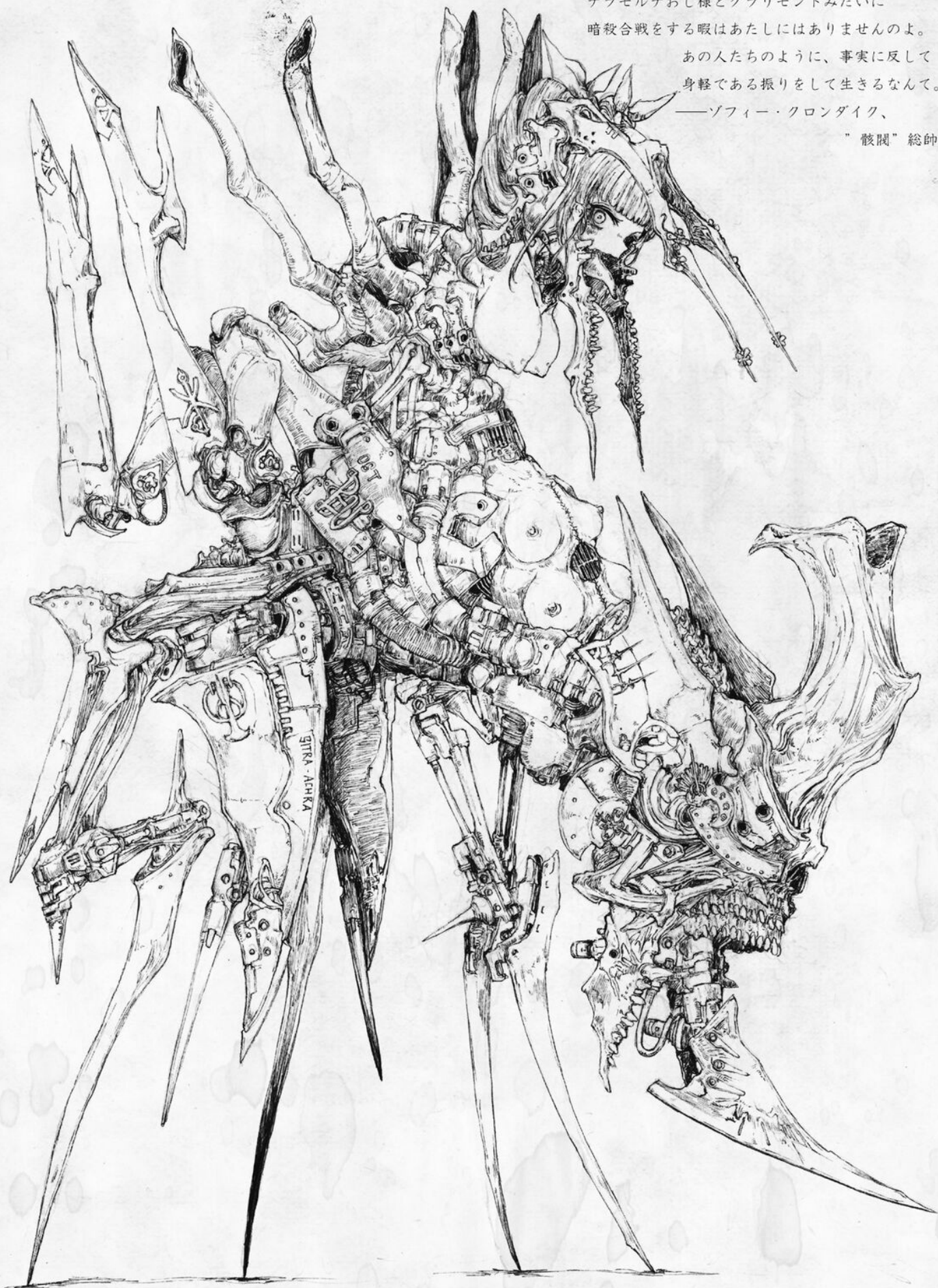
デラモルテおじ様とクラリモンドみたいに

暗殺合戦をする暇はあたしにはありませんのよ。

あの人たちのように、事実に対して
身軽である振りをして生きるなんて。

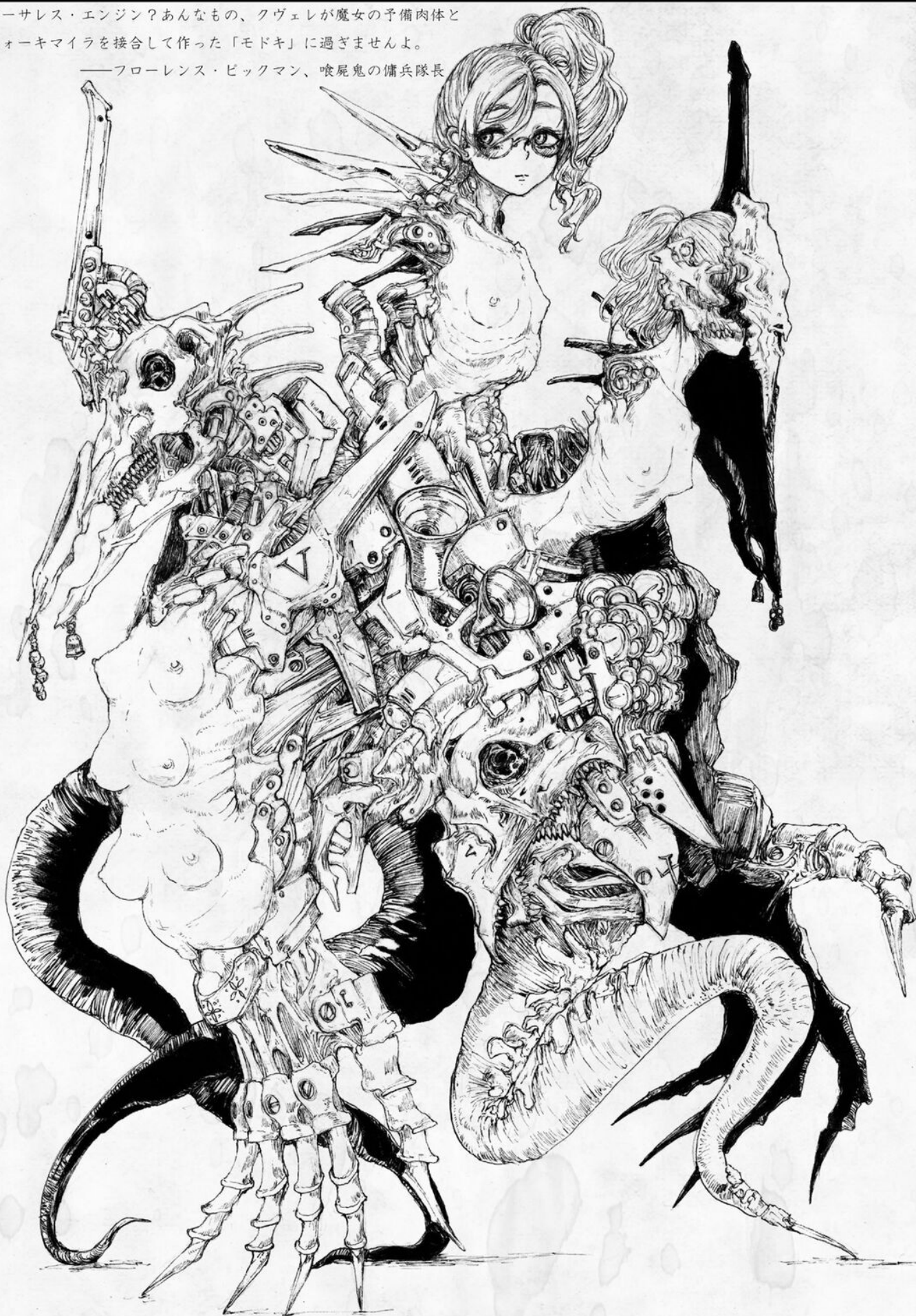
——ゾフィー・クロンダイク、

“骸閥”総帥



ソーサレス・エンジン？あんなもの、クヴェレが魔女の予備肉体と
ウォーキマイラを接合して作った「モドキ」に過ぎませんよ。

——フローレンス・ビックマン、喰屍鬼の傭兵隊長



あの柔い肉と熱い血潮を備えた”人工物”が出てきたときは
これぞ人の世の醍醐味、ほとんどは退屈な任務と分かっていて
降りて来た甲斐があったと思ったね。

まあ期待外れの短いムーブメントではあった、よく考えれば
二度手間でしかないしな。だがそういう不合理的さ、不細工さこそ
俺が君たちを愛する理由なんだ。

——業の天使ガスデズデナ、元テックキーパー

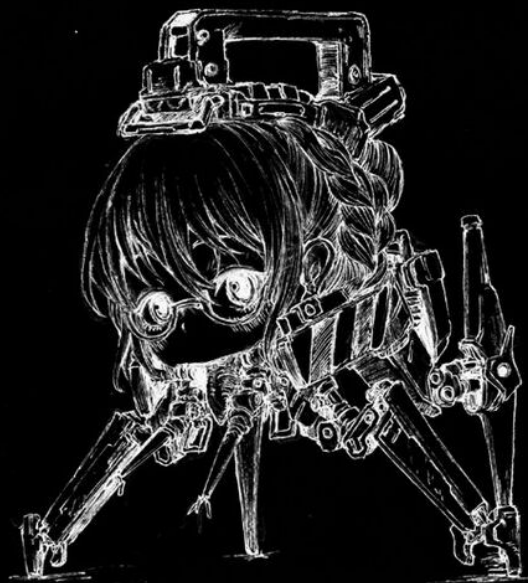


私たちの孤立のなかでマルセルはすっかり私たちのものだったので、
それが他と変わらない死者であるということが私たちにはまったく納得いかなかったのだ。

——ジョルジュ・バタイユ『眼球譚』

これまでと
違うことをやりたいなど
ぼんやり思っているうちに
やがて時は行き過ぎ
たいへんなことになってしまいました。
中途半端な気持ちはいけませんね。

メグリム・ハルヨ



奥付

『ダイイング・ファイア・コンソーシアム』

2016/10/23 COMITIA118にて発行

作者：メグリム・ハルヨ（朽techS）

連絡先：horuyoi@hotmail.co.jp

pixivID:133923

印刷所：ねこのしっぽ（有）さま

過去作アーカイヴス電子版はこちら▼

<https://booth.pm/ia/items/151352>

